

熱帯の山水画

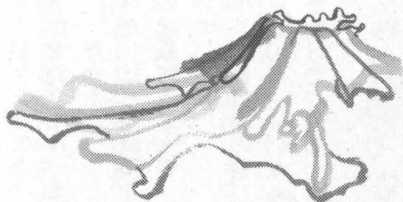
山本博之

熱帯のマレーシアには、山水画のような風景の町がある。クアラルンプールからアブラヤシ農園を車で二時間も走ると、お椀をかぶせたような奇妙な形の岩山がいくつも見えてくる。この町の名前はイポーという。この土地はかつて世界のスズ生産の中心地として賑わい、イポーの町では映画や演劇などの娯楽産業も栄えていた。地方都市ながら文化の香りが漂っている。

イポーにいと、時間が止まっているような感覚に襲われる。旧市街にはイポー名物の白珈琲を出す伝統的な様式の喫茶店が何軒も残っている。郊外には、かつてスズの露天掘りをした跡が放棄され、雨水が溜まってできた池があちこちにある。これらの池も、イポーの景観を現実の世界とかけ離れたものになっている。奇妙な風景に囲まれ現実味が乏しい空間から、近

年、マレーシア映画の新潮流と呼ばれる映画がいくつも作り出されている。

マレーシアは、マレー人、華人、インド人、先住民などから成る多民族社会だ。イスラム、中国、インド、そして西洋などの文明が集まり、それぞれのアイデンティティを維持しながら一つの社会を作り上げてきた。共生のための工夫として、マレーシアでは、民族や性別や社会的地位などに応じて振舞い方を決めて、公の場ではそのように振舞うというしきたりが形



作られてきた。マレー人はマレー人らしく、男は男らしく、聖職者は聖職者らしく振舞う。親しい間柄では「らしさ」にとらわれる必要はないけれど、初対面の相手や公の場ではみんな「らしさ」を引き受け、それによって多様な人々の間の摩擦や衝突を回避してきた。これほど多民族・多宗教が集まっていながら民族間の暴力沙汰がほとんどない社会は珍しい。ただし、「らしさ」を引き受けることの窮屈さを人々が感じないわけではない。窮屈さと安定・発展の間でどう折り合いを付けるか、マレーシアの人々はバランスの中で暮らしてきた。

「らしさ」を振舞おうとすれば、異なる民族どうしの関係は型通りのものになりやすい。そのためもあり、マレーシアは多民族社会でありながら、マレーシア映画の中で異なる民族が出会うことはほとんどなかった。『細い目』（ヤスミン・アフマド監督、二〇〇四年）は、イポーを舞台に、金城武命のマレー人少女オーキッドと海賊版CD売りの華人少年ジェイソンの恋愛を描いている。この作品は、民族や宗教を超えた恋愛を描いたためではなく、「らしさ」を壊すさまざまな逆転が見られることでマレーシア映画の画期をなすものとなった。

オーキッドが花束をもらっても喜ばず、ジェイソンが恋愛の詩を好むのも一般的な「女らしさ」や「男らしさ」と逆転しているが、肝心なのはそこではなく、それぞれの登場人物の役割に伴う力関係が逆転してい

ることだ。

初デートで入った店でオーキッドに食べ物の好みを尋ねられ、ジェイソンは自分の好き嫌いを答えるのではなく、オーキッドの顔を窺いながら、オーキッドの好き嫌いにあわせて答えようとしている。ここでは一般的な男女の関係が逆転している。

オーキッドの母親イノムが外出しようすると、オーキッド一家の使用人ヤムがイノムに食材の買い物を頼む。夕方、ヤムがソファで寛ぎながらテレビを見ている隣で、イノムが夕食の下準備をしている。使用人と雇い主の関係が完全に逆転してしまっている。

『細い目』では、それぞれの振舞い方を逆転させることで、「らしさ」を積極的に壊した「もう一つのマレーシア社会」を描いている。

「らしさ」を求める人たちからは、『細い目』はマレーシアの現実を描いていないと批判する声もある。映画や文芸でも「らしさ」を表現すべきだという。このような批判を受けながらも、マレーシア映画の新潮流は、「らしさ」を積極的に崩そうとして、さまざまな関係を振ったり逆転させたりした物語を作っている。熱帯の山水画のような、どこか現実にはない土地という雰囲気漂わせているイポーが、そのような映画の舞台になっていることは決して偶然ではないだろう。美しいイポーを舞台に、現実にはないマレーシアを美しく描く。今は現実ではないかもしれないけれど、今後もずっと現実にならないわけではない。